地域全戸加入の集落組織が地域を活性化

―上鹿妻(かみかづま)第一地区協同組合―

調査第一部長　斉藤由理子

1　農事実行組合から地区協同組合へ

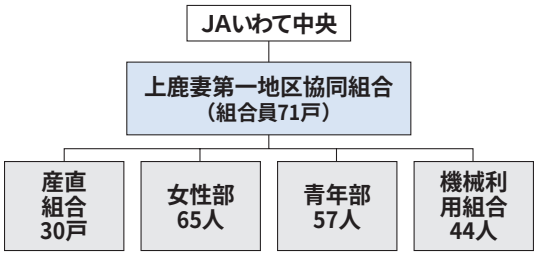
上鹿妻第一地区協同組合(以下「地区協」と略す)は盛岡市の中心部まで車で15分の距離にある３集落(朴、小和田、稲荷場)の組織である。この地域は奥羽山脈の山麓から雫石川流域に広がる平野部に位置し、稲作を中心に果樹、野菜を組み合わせた都市近郊型農業が行われている。

地区協の前身はJAいわて中央の集落組織、上鹿妻第一農事実行組合である。地区協が設立された契機は、農事実行組合から農家組合への名称変更を農協から要望されたことで、これを受けて農事実行組合では1988年から89年にかけ計11回の話し合いを行った。その結果、89年に、「上鹿妻第一地区協同組合」と名称を変更、また、農協組合員だけの組織を、非組合員も含め地域内の全戸加入の組織とした。後述のとおり農家比率の高い地域だが、市中心部に近いため農家の子弟は会社勤めが多く、農業に従事しない人が増え、それらも含めないと地域のまとまりがなくなることから、地域の全戸が加入することが必要と考えた。名称も地域全体の組合にふさわしいものとした。地区協となってからも農協の集落組織という性格は持ち続けている。

2　組合員と組織

地区協は71戸の組合員からなり、内訳は、農家非農家別には、農家53戸、非農家18戸、農協の組合員資格別には、正組合員53戸、准組合員８戸、員外10戸である。農家及び正組合員の比率が比較的高いのは、①市中心部への通勤圏であり、農外就業の農家子弟が地域内に留まっていること、②農業振興区域のため宅地化が難しく混住化が進みにくいためであろう。

第1図　上鹿妻第一地区協同組合の組織



地区協の役員は、組合長、副組合長、顧問、事務長、事務次長、理事(各集落から１名、計３名)、営農部長、女性部長、青年部長、監事(３名)、班長(３名)である。役員会は年10回程度必要に応じて開催され、監事を除く役員が出席する。総会は年１回３月に開催される。

地区協の下に、産直組合、女性部、青年部、機械利用組合の４つの組織がある(第１図)。

3　各組織の活動

(1) みんなをつなぐパイプ役の地区協

地区協の主な活動は隔年の農リンピック開催と海外農業・農村研修、毎年の国内旅行である。

２年に１度、６月に開催する「農リンピック」は、水田を舞台に、馬による代掻きや稲(もち米)の手植えなどの「伝統農法の継承」と、泥んこボートリレー(写真)、泥んこビーチバレーなど「田んぼで遊ぶ」催しを行う。子供も含めて地域住民が泥んこになって楽しむ１日である。農リンピックは、地区協が主催、青年部が大会運営を担当、女性部は小昼(コビリ)というおにぎり等の軽食を準備、産直組合はテント・椅子・机の貸出など、各組

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

農リンピックの泥んこボートリレー

織が協力する。

会場となった水田は、その後子供たちの農作業体験田となり、もち米を植え、秋には稲刈り、稲こき、秋祭りも行う。

また、地区協は農協の集落組織として、①農協からのお知らせ等の農協組合員への配布、②営農指導会開催、③総代の選出を行っている。

このように、地区協は、下部組織、地域そして農協を結ぶ、パイプ役を担っている。

⑵ 実働部隊としての青年部

青年部は、90年に15人の有志により設立され、現在では部員は57人に拡大した。親子で加入する家も、また地域外に転居しても部員を続ける人もいる。飲み会中心のコミュニケーションの場として出発し、その中で、農リンピックを企画、運営、また青年部の施設３棟を自分たちで建設するなど、発想力と行動力にあふれている。また地域の農薬散布の共同受託や鹿妻堰の土手の草刈を行い、地域農業を支援し環境を整備するとともに活動資金を確保し、神社の祭では神輿渡御、結婚式での木遣り演舞も行っている。

⑶ 地産地消の拠点「あいさい舘」

2000年に、地区協の有志により、産直組合が設立され、産直施設「上鹿妻の産直　あいさい舘」を開設した。施設の建設資金は産直組合の入会金と借入金により、ほぼ会員の手作りで建設された。「あいさい」には愛菜、愛妻、愛祭、愛歳、愛倅という意味が込められている。商品の大部分は、組合員の作る農産物（野菜・果樹中心）と加工品（女性部による納豆、餅菓子、漬物等）である。組合には夫婦単位で加入し、主に、男性が施設と生産を担当、女性は販売を担当し交代であいさい舘で接客をする。

地域の農家は減反した水田で主に野菜や果樹を栽培しており、農家の３分の２はあいさい舘だけで野菜を販売する。あいさい舘に冬場も野菜を出荷するため、ハウス栽培も行われるようになった。あいさい舘の総売上は地域の農業総生産額の約６割に相当する。あいさい舘が「地産地消」の拠点となり、稲作専業から稲作と野菜を組み合わせた生産構造へと地域農業の転換を促した。また、あいさい舘向けの野菜作りが高齢者を元気にするという効果もあがっている。

４　地域活性化における集落組織の特徴

地区協は、農協の一組織としての役割を超えた多様な活動で地域活性化に取り組み、大きな効果をあげてきた。

成功の要因を組織面からみると、非農家を含む全戸加入の組織であることと、家族の各構成員が多様な組織に属し活動に参加していることが重要であろう。すなわち、経営主層は地区協、女性は女性部、後継者層は青年部、高齢者及び経営主夫妻は産直組合に参加する。なかでも、行動力と発想力を持つ青年部員が、多様な職業の仲間とのコミュニケーションを楽しみながら、自由な発想で様々な活動をリードしていることが地区協のパワーの源であろう。また、青年部での地域のリーダー育成が、本組合が活発な取り組みを続けてきた要因の一つと考えられる。

（さいとう　ゆりこ）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。